横浜医学，66，529-536（2015）

原　著

表在性腫瘤に対する術前超音波検査の有用性についての検討

藤　井　晶　子[1)]，醍　醐　佳　代[1)]，前　川　二　郎[2)]

[1)] 国家公務員共済組合連合会　横浜栄共済病院　形成外科，
[2)] 横浜市立大学医学部　形成外科学

要　旨：皮下腫瘍や軟部腫瘍に対して行われる術前画像検査の中で，超音波検査は最も低侵襲で簡便な画像検査の一つである．しかし超音波診断と術後病理診断が異なる場合も少なくない．今回我々は2012年６月～2014年６月の２年１か月間に，当科で術前超音波検査を施行した後に切除術・摘出術を施行し，病理診断で疾患が確定した150症例を対象とし，超音波診断と術後病理診断の一致率，初診時臨床診断との比較，及び診断不一致例の要因・傾向等につき検討した．150例全体での診断一致率は72.７％で，そのうち脂肪腫・粉瘤は診断一致率が高く，石灰化上皮腫，血管腫は低かった．術前検査で粉瘤と診断したが悪性腫瘍であった例が２例見られた．初診時臨床診断と術後病理診断との診断一致率は66.０％であり，50例において臨床診断と病理診断が不一致であった．この50例のうち，15例で術前超音波診断と病理診断の一致が得られた．超音波検査は，臨床診断よりも診断一致率が高く，まずスクリーニング目的に行う術前検査のひとつとして有用であることが示唆された．しかし内部に出血，壊死，嚢胞変性などの質的変性を伴う腫瘍や，血管腫，ドプラで周囲血流やアーチファクトを拾いやすい場所の病変では，超音波のみでの診断には限界があると考えられた．

Key words:　皮膚腫瘍（skin tumors），皮下腫瘍（subcutaneous tumors），超音波検査（ultrasonography）